マンガ 李白・杜甫の思想

蔡志忠・作画 和田武司・訳 野末陳平・監修

江苏工业学院图书馆
藏书章

マンガ 李白（りはく）・杜甫（とほ）の思想

蔡志忠・作画
和田武司・訳　野末陳平・監修

講談社+α文庫

監修者まえがき

NHKテレビで、「漢詩紀行」を楽しく見るが、この番組は漢詩を映像と中村吉右衛門の朗読で紹介し、こちらのイメージをいやが上にもふくらませてくれるところに、長寿番組の秘密があるのだろう。じゃ、漢詩を、ガラリ趣(おもむき)をかえてマンガにしてみたら、どういうことになるのだろうか。

「不謹慎な！」

と怒る人は今時少ないと思うが、漢詩のマンガ化はちょっと意表をつくので、我が国ではその例を知らない。しかし、台湾の一流マンガ家・蔡志忠(さいしちゅう)さんがこの実験（？）に成功し、この試みは現地で好評と聞く。

これを私が監修する中国古典のマンガシリーズの一冊に加えることにした理由の一つは、これまでこういう漢詩のマンガ化に挑戦した本が日本にはなかったからである。

出来ばえについては、読者諸兄の批判を仰ぐこととして、学生時代に習い覚えたおなじみの漢詩がどんな感じのマンガになっているかは、読まれてのお楽しみといっておこ

う。

私としては、好きな漢詩がマンガによって平板になってしまう不満もないではないが、視覚化によって別の味わいかたができる点で新発見もあった。

今回は李白と杜甫の詩を中心に再編集し、唐代の代表的詩人である両人の生きかた、考えかたがわかるような構成になっている。

李白は、

「白髪三千丈」（秋浦の歌）

でおなじみ。杜甫は、

「国破れて山河あり」（春望）

でこれまた、読者諸兄ごぞんじ。本書で多分どちらかの詩人をより好きになってしまうことだろうが、私の好みは、李白である。

実は大正大学で学生たちに中国古典を教え、また一般社会人のかたにも、漢詩を講義した経験によると、杜甫より李白のほうが、取っつきやすいところもあって、やや人気が上だった。

二人の伝記らしきものは本文を見て頂くとして、手っとり早く言ってしまえば、

「李白の詩は豪快で自由奔放で、人生の快楽を教えてくれるから、心が解放的になる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ここには人生のロマンがある」

こんなところが李白の詩で、いっぽう、

「杜甫の詩は、まじめで誠実で真剣に人生を見つめるから感動的だが、社会派の面が濃すぎて地味だから、楽しさ面白さがやや足りない」

という感じになる。社会派詩人の杜甫はクロウト受け、快楽志向の李白はシロウト受けと言えなくもない。

私個人は、李白の詩が大好きだ。李白のイメージは、侠客仲間とつきあいがあっただけにハミだし人間の痛みがわかる、山奥で小鳥相手の隠者に憧れていたところを見ても落ちこぼれの敗者の気持ちがわかる、それを内に秘め、酒の力を借りて豪放な詩をつくるところに人間の弱さがにじみでる、ざっとまぁこんなところが、独断で言えば、李白の詩が日本人に親しまれてきた理由の一端かもしれない。

李白は、酒と一生縁がきれなかった。

「李白は一斗詩百篇、長安市上酒家に眠る」

と友人の杜甫が歌ったように、李白は酒におぼれながら名作をつぎつぎと生み、酒の上での失敗も少なくなく、それ以上に、酒のいきおいでわざと権力に刃向かって、結局は、常識の枠にはまりきれない生きかたをしてしまった。

そこが私には興味がある。常識の枠外に飛びだそうとしてそれが果せぬ読者の代弁を、李白の詩はしてくれているのである。

杜甫は対照的に、家族を抱え安定した生活を求めて苦労を重ねた。杜甫の一生も決して恵まれたものではなく、

「杜甫、一生憂う」

と評されるように、いつも充されぬ心で社会の矛盾と直面していた。杜甫の詩にはアソビがなく、貧窮の中で時の流れに弄ばれる人間の運命を追求していたから、

「李白もいいけど、杜甫のほうが深みがある」

こんな感想もあって不思議はない。

最近しみじみ思うのだが、漢詩はただ訳したところで特別の面白味はない。むしろ訳さなくてもいいから、読みくだして朗読してみる、これが意外と心の琴線にふれる。

「わかりにくい所は飛ばし、原文のリズムとフンイキを味わって、自分流に理解するのが最高の鑑賞法ではないか」

私はこの主義で、漢詩を読みながら情景をイメージしてみるのが楽しい。

となると、漢詩のマンガ化はもっとも現代的な漢詩の読みかた、味わいかただ。

これらの詩に初めて接する読者もいるだろうが、先入観がないだけに、それはむしろ

武器となる。詩全体の鑑賞をやめて、

「名文句だけ、覚える。それを自分のボキャブラリーに加える」

これはどうだろう。世界に通用する、誰もの心をうつ名文句を覚えれば、これは大きな財産ではなかろうか。

読者よ、願わくばこの小さな一冊が一生の伴侶とならんことを。

平成九年九月

野末陳平（のずえちんぺい）

目次

詩仙 李白（りはく）

李白解説 20
李白の一生 28
子夜（しや）春歌 38
子夜夏歌 38
子夜秋歌 41
子夜冬歌 41
月下独酌 44

静夜の思い　47
怨情　47
早に白帝城を発す　50
春の思い　50
玉階怨　53
孟浩然に贈る　53
黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る　56
金陵の鳳凰台に登る　56
清平調詞の一　60
清平調詞の二　60
清平調詞の三　63
汪倫に贈る　63
廬山の廬侍御虚舟に謡い寄す　66
将進酒　72
廬山の瀑布を望む　76
秋浦の歌　76

詩聖 杜甫（とほ）

杜甫解説 80
杜甫の一生 88
岳を望む 99
月夜（げつや） 99
春望 102
月夜 舎弟を憶（おも）う 102
天末にて李白を懐（おも）う 105
旅夜 懐いを書す 105
岳陽楼に登る 108
蜀相（しょくしょう） 108
客至（かくいた）る 111
登高 111

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

江南にて李亀年に逢う　114
官軍の河南河北を収むるを聞く　114
石壕の吏　117
飲中八仙歌　121

精選 唐詩三百——千古の絶唱

唐代詩人小伝　124
王勃
杜少府の任に蜀川に之くを送る　128
陳子昂
幽州台に登る歌　128
賀知章
郷に回って偶〻書す　131

張九齢
感遇　131
王之渙
鸛鵲楼に登る　134
出塞（涼州詞）　134
孟浩然
洞庭湖を望んで張丞相に贈る　137
春暁　137
王翰
涼州詞　140
王維
送別　140
終南の別業　143
輞川閑居　裴秀才迪に贈る　143
九月九日　山東の兄弟を憶う　146
少年行　146

凝碧詩 149
偶然作る 149
渭城の曲 152
竹里館 152
相思 155
雑詩 155
山居秋暝 158
積雨輞川荘にて作る 158
鹿柴 161
張少府に酬ゆ 161
渭川の田家 164
崔顥
黄鶴楼 164
王昌齢
芙蓉楼にて辛漸を送る 168
閨怨 168

春宮の曲　171
出塞　171
岑参
京に入る使いに逢う　174
韋応物
秋夜　丘二十二員外に寄す　174
張継
楓橋夜泊　177
李益
外弟に喜び見いて又別れを言う　177
夜、受降城に上って笛を聞く　180
孟郊
游子吟　180
王建
新嫁娘の詞　183

劉禹錫
烏衣巷(ういこう) 183
竹枝詞(ちくしし) 186
白居易
「古原の草」を賦(ふ)し得て別れを送る 186
放魚詩 189
柳宗元
江雪 193
元稹
悲懐を遣(や)る 193
賈島
剣客(けんかく) 196
李賀
蝴蝶の舞 196
杜牧
赤壁(せきへき) 199

秦淮に泊す 199
揚州の韓綽判官に寄す 202
懐いを遣る 202
清明 205
杜秋娘
金縷の衣 205
李商隠
無題 その一 208
無題 その二 208

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com